



Title	ソグド語の奇妙な広律について
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2025, 40, p. 243-266
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ソグド語の奇妙な広律について

吉田 豊*

0. はじめに

ウイグル史が専門の森安孝夫さんとソグド語が専門の私は、もっぱら研究面ではあったが、生前実に 40 年ほど親密な交流があった。それは二人の学問的関心から必然であったようにも思う。というのは、ソグド語を話す人々とウイグル語を話す人々は、ソグド語が死語になる 11 世紀初めまで密接な交流があったからであった。そのことは、ソグド文字でウイグル語を表記することによって、ウイグル文字がいわば自然発生的に成立したことからも容易に理解されるだろう⁽¹⁾。これは中央アジア史、あるいはシルクロード史を研究する人にとっては常識になっている一方で、移行期の実態と詳細はよく分かっていない。ソグド文字の草書体と初期のウイグル文字は区別がつかないほどよく似ている。しかし、アルファベット表を比べてみると、ソグド文字のほうは元になったアラム文字のアルファベットと同じで、ソグド語の表音に使わない 4 文字 (daleth, teth, ain, koph) も、字形はともあれ、本来の場所に文字らしきものが置かれている一方で、ウイグル文字のアルファベットでは最初からそれがない。またウイグル文字のアルファベットの末尾には、文字 r に補助記号を添えた文字 l 以外に⁽²⁾、別の 3 文字 (š, m, x) が追加されているが、ソグド文字のアルファベットには対応するものがない。ソグド文字がウイグル文字に変貌する間に、一体何が起きていたのか全く分からない⁽³⁾。

ウイグル仏教の成立背景については、ソグド語仏典の影響が大きかったとする「ソグド仮説」と、トカラ仏教の影響を重視する「トカラ仮説」がある。森安さんは「トカラ仮説」の提唱者で

* 帝京大学文化財研究所客員教授 (YOSHIDA Yutaka. Guest Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University). 本稿の編集段階で、編集者の松井太教授は本稿にあった首尾一貫しない表現などを指摘してくださった。記して謝意を表す。もちろん、本論文に残る誤りなどはすべて筆者の責任であることは言うまでもない。

(1) ソグド文字からウイグル文字への移行が、何ら作為を含まず自然であったことについては Sims-Williams (1981, p. 359) で指摘されている。

(2) ベンジケントで見つかった 8 世紀初めの頃の陶片に書かれたソグド文字のアルファベットでは、最後の文字 t のあとの 23 文字目に lamed が置かれている。これをウイグル文字のアルファベットと同様に [l] の発音を示していたと考えるむきもある、Sims-Williams (1981, p. 350)。Sims-Williams はウイグル文字のアルファベットの影響の可能性を指摘する。しかし 8 世紀初めには、ウイグル文字はまだ存在していないから、仮に影響関係があるとすれば、ソグドからウイグルへ、であったろう。詳しくは吉田 (2022, pp. 61–69) 参照。

(3) 森安さんはウイグル文字のアルファベットについて論文を発表している：「ウイグル文字新考——回回名称問題解決への一礎石」、『東方学会創立五十周年東方学論集』東方学会、1997, pp. 1238–1226 (逆頁)。その研究始まりは、1988 年二人で訪れたベゼクリク千仏洞の落書きで、そこにアルファベットが書いてあることに気づいた筆者は写真の撮影を森安さんをお願いした、森安 (1991, pl. XIVa)。

あり、さらにウイグル=マニ教の影響をも重視すべきことを、初期の論文で主張している：「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答（P. t. 1292）の研究」『大阪大学文学部紀要』25, 1985, pp. 1-85, +1 pl.; 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, 1989, pp. 51-76. ウイグル仏教に対するマニ教の影響については、仏教の基礎語彙である「煩惱」や「法」, 「戒律」などを意味するウイグル語の単語が、仏教ソグド語の対応する語からの借用語ではなく、マニ教ソグド語に見られる語彙であることなども重要な証拠としておられる。当時それらは、筆者との日常の研究面の交流の中で繰り返し議論されるテーマだった。ただ「トカラ仮説」がすんなり受け入れられることはなく、「ソグド仮説」を支持するような言説が折に触れて現れて、それらに対して森安さんは、私には過敏と思えるほど反応された。決まってこんな論文が出たが、その論文のこの部分をどう思うかというようなメールが届くのであった。そのテーマでは、J. Wilkens の論文（“Uyghur Buddhism and the impact of Manichaeism and native religion: The case of religious terminology,” in: L. Doney et al. (eds.), *Buddhism in Central Asia III: The Impact of Non-Buddhist Influence, Doctrines*, Brill, 2023, pp. 90-122）に関する議論が最後であったように記憶する。メールの日付を見ると 2024 年 4 月 16 日から 18 日にかけて 6 通の往復メールがあった。4 月 17 日のメールは、豊中病院から自宅に帰ったときに書いておられて、次のような文で締めくくられている：

いずれにせよ、吉田さんがおっしゃる通り、「ソグド仏教とウイグル仏教の関連では、10 世紀トルファンで書かれたソグド語仏典と、同じ時期のウイグル語仏典の間にどんな関係があったのかを考える時期に来た」のだと思います。さらには、ソグド文字で書きされたウイグル語仏典や Maitrisimit や Dashakaramapatavadanamala のような最初期のウイグル語翻訳仏典出現の背景も、同時に考慮すべきでしょう。とはいえ、こうした問題の解決は、もう私の仕事ではないだろうと認識しています。

このメールの後、4 月の内に癌の転移が見つかり死を覚悟された。そしてそのわずか 4 ヶ月後に他界された。

1990 年代の後半だったと思うが、森安さんと「中央アジア学フォーラム」という研究会を組織し、私が定年退職する頃まで 20 年近く存続していた。当時は大阪大学東洋史研究室に私と同学年の荒川正晴さんが赴任して来られたので、実質的にはこの 3 人が主催者であった。シルクロード学にかかわる最新の研究成果を共有するための発表会で、阪大の東洋史と当時筆者が奉職していた神戸市外国語大学の学生を中心にして、関西周辺だけでなく東京方面からも参加者があった。最初は阪大と神戸市外大を交互に会場としていたが、筆者が京都大学に異動してからは阪大だけの開催となった。本稿は、2005 年 4 月 2 日に神戸市外大で開催された中央アジア学フォーラムで発表した内容をもとにしている。その発表の奇をてらったタイトルは「ソグド語仏典はウイグル語仏典を超えられるか？——ソグド語に翻訳された広律について——」というものだった。

森安さんを追悼するこの論文を、思い出深い『内陸アジア言語の研究（SIAL）』に寄稿する。本誌も森安さんと筆者が二人で発足させた雑誌であった。本来は神戸市外大の外国学研究という

モノグラフシリーズの中の 1 冊で、故人となられた長田夏樹教授と庄垣内正弘教授が不定期で刊行していたものを、私が神戸市外大に赴任した 1988 年の第 4 号から、森安さんと私が編集し定期的に刊行することにした。その第 4 号には、森安さんと私の共同論文「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」が掲載された。これはその年の連休の時期、二人で行った新疆ウイグル自治区の調査旅行の成果であった。同じ号に森安さんの「ウイグル文書割記（その一）」も掲載されている。当時山田信夫先生のウイグル語契約文書に関する遺稿を、『ウイグル文書集成』として出版する準備をしておられて、その過程で得られた成果を「ウイグル文書割記（一〜四）」としてまとめ、すべて本誌で発表された。1990 年の第 7 号以降は神戸市外大から独立、8 号からは阪大東洋史研究室が版下作りから出版まで行っている。雑誌の存続には大変な苦勞があり、私は特に京大に異動してからは相談役程度だったので、これほど長続きしていることに関して、荒川さんや松井太さんを始めとする阪大の関係者には感謝の言葉しかない。

1. ソグド人僧侶のためのソグド語仏典

鉄門の南側の旧バクトリア側と異なり、その北側のソグドでは仏教寺院の遺跡は現在まで発見されていない⁽⁴⁾。クシャーーン朝の領土内には広まったインド仏教は、鉄門を超えて普及しなかった。つまり「ソグド仏教」というものはおよそ存在しなかった。従って現在我々が見ているソグド語仏典は、ソグド本土で仏教が受容された結果成立したものではなく、仏教が盛んな地域に移住したソグド人たちがその地で改宗し、そこでの仏教信仰を支えるために翻訳されたものと考えられる⁽⁵⁾。無論例えば中国では、ソグド人が漢文仏典の書写をサポートしたり⁽⁶⁾、寺院に喜捨することもあった。『慈恩伝』のなかで玄奘は、涼州の熱心なソグド人（葱右諸國商侶）の仏教信者の様子を伝えている。中国東北の幽州の房山雲居寺石経題記にもソグド人の寄進者が確認される、森部 (2010, pp. 46–56)。

ソグド語仏典が見つかっているのは、主に敦煌とトルファンで、わずかにショルチュクでも出土している。しかしそれらはたまたまそこに残されただけで、ソグド語仏典は、中国各地のソグド人居住地に存在していたであろう。例えば西安では、ソグド人の仏教信者の残したバイリンガ

(4) ソグド語圏であったタラス以東のチュー河流域には仏教寺院の遺跡が存在している。ただこの仏教信仰は北西インドからパミールの西を経由して伝播したのではない。当初は 7 世紀後半の唐による碎葉鎮設置に伴い中国仏教の影響が及び、その後は隣接する東トルキスタンを経由して仏教が伝わっていた。つまりソグド本土経由で仏教が伝播していたわけではない。碎葉鎮の遺跡の発掘と仏教関連の遺物についての最新の研究については、山内和也・齊藤茂雄編『アク・ベシム遺跡を掘る：よみがえるシルクロードの交易都市』（アジア遊学 302）勉誠出版、2025 に掲載された諸論文を参照せよ。

(5) 筆者はたびたびソグド人の仏教信仰は colonial phenomenon であるという主張を繰り返している。例えば吉田 (2015, pp. 25–26; 2017, pp. 52–49) を参照せよ。

(6) 有名などころでは武周期のトルファンのソグド人康氏の写経功德碑文がある、榮新江 (2001, pp. 204–221)。この碑文の最新の研究には、新しい断片が付け加えられた：National Museum of Korea (ed.), *Ancient Central Asian writings in the National Museum of Korea I: Turpan artifacts with Chinese characters* (in Korean), National Museum of Korea, 2020, pp. 172–199, 212–213。

ルの墓誌が発見されている、吉田 (2024, pp. 3–4, 7–8). それによれば信者の女性は、中国固有の仏教信仰である三階教の熱心な在家信者になっていた。敦煌出土のソグド語仏典『酒を誡める経』の奥書には、開元 16 (728) 年洛陽で翻訳されたと記している⁽⁷⁾。現在まで研究され内容が明らかになっているソグド語仏典の大半は、偽経も含む漢文仏典からのソグド語訳と、原典は特定できないものの、西域北道で信仰されていた説一切有部の学派に連なる、いわゆるトカラ仏教の仏典のソグド語訳である⁽⁸⁾。

これらは基本的に大乘經典と説話類の翻訳で、ターゲットは在家の信者であったはずである。彼らは自分の功德のために翻訳・書写してもらっていたものと考えられる⁽⁹⁾。翻訳していたのは、ソグド人僧侶で、ソグド語以外に、漢文や梵語（西域北道ではトカラ語も）を理解したのであろう。しかし彼らは、ソグド人固有の教団を形成していたのではなく、基本的に各地域の僧団に所属していたようだ。筆者がしばしば例として言及するのは四川淨衆寺のソグド人僧侶神会 (700～794) で、『宋高僧伝』によれば、彼の一族は石国出身の商人であった (吉田 2015, p. 35)。一族では在唐三代目の彼が出家している。8 世紀後半敦煌で活躍した曇曠 (～788?) などもソグド商人の一族出身であったらしい。安史の乱で中国本土が混乱していたときに、出身地である河西の建康に戻った、吉田 (2015, p. 48, n. 27)。建康は漢文の墓誌でソグド人が中国での出身地とする河西の町であったから (石見 2016, pp. 285–286)、彼もまたソグド商人の子孫であった可能性が高い。華嚴宗の第三祖として有名な法蔵 (643～712) などもソグド人の子孫であった、吉田 (2015, p. 35)。トルファンを含む西域北道でも事情は同じで、ソグド人僧侶は在地の教団に属していたのであろう。ただしトルファンの場合、中国仏教とトカラ仏教の両方が行われていた点が異なっている。

それではどのような仏典がつくられたのであろうか。今まで内容が特定されているソグド語訳された仏典の大半は、大乘の經典と説話類であることは上で述べたが、これらは基本的に在家の信者たちを想定していたに違いない。しかしながら、もっぱらソグド人僧侶をターゲットにしたと考えられる仏典も見つかっている。筆者がかつて発表した『四分律戒本』のソグド語訳は、僧侶のための戒律の条文である、Yoshida (2015, p. 173, no. 29)。ソグド語訳ではないが、『大乘起信論』からの引用を含む漢文仏典の、個々の漢字の発音をソグド文字で記した仏典もトルファンから出土している、Yoshida (2013a, pp. 169–175)⁽¹⁰⁾。この漢文仏典自体は『大正大藏經』（以下『大正』と略）に未収録であり、どのような注釈書であったかは分からない。しかし大乘仏教の經典ではなく注釈書を読み上げることが、一般信者の功德になったとは考えられず、これは必ずソグ

(7) ソグド語仏典の中国での翻訳の問題については吉田 (2015) を参照せよ。

(8) 2015 年までに発表されたソグド語仏典の網羅的なリストは Yoshida (2015) にある。ここには 2015 年の時点で筆者が把握していた未発表の仏典も含まれている。未発表もふくめベルリンに保管されているトルファン出土ソグド語仏典の悉皆カタログもある、Reck (2016)。

(9) 実際 Pelliot sogdien 8 に残された奥書には、敦煌の康氏が一族の功德のために翻訳してもらったと書かれている、Yoshida (2009, p. 294)、吉田 (2015, pp. 36–37)。

(10) 実際には、ソグド文字で発音を書いてから対応する漢字を添えている。

ド人の仏僧がこの注釈書を、中国語の発音も含めて学習していたことを示すであろう⁽¹¹⁾。もしもソグド人仏教僧侶固有の教団が存在していなかったとしたら、漢文や梵語を理解していたはずのソグド系の僧侶のために、僧侶用の仏典を何故わざわざソグド語に翻訳する必要があったのか私にはよく分からない。ただどのような仏典が残されているか考究してみることはできる。

ベルリンのトルファン学研究所が、国立図書館から委託されているトルファン出土のソグド語仏典には、未発表の断片が相当数残されていて、その中にまとまった量の断片を含むテキストがいくつか知られている。Reck (2016) のカタログでは、Fragmente eines Kommentars (Reck 2016, pp. 405–406) としてリストされている断片群がその一つで、実に 50 点の断片がそのグループに属する。筆者が指摘したように、内容から『大乘起信論』の注釈書のソグド語訳であることはあきらかである、Reck (2016, p. 41)。上で言及した漢文の注釈書との関連も疑われる。さらに最近、同一写本に由来するもう一つの断片の写真が W. B. Henning の遺品中に発見された。原文書はベルリンから失われているものの、*So 14500 という整理番号を与えられて刊行された、Benkato (2024)⁽¹²⁾。

ところで、ソグド系の僧侶であった法蔵には『起信論』の注釈書が 2 点（『大正』vol. 44, no. 1846, 『大乘起信論義記』；同, no. 1847, 『大乘起信論義記別記』）知られているが、それとは一致しない。筆者は最近その内の少なくとも 2 断片（So 14230(5), *So 14500）に、新羅の仏僧元暁（617～686）が作った注釈書（『大正』vol. 44, no. 1844 『起信論疏』）からの引用があることを発見した。詳しく調べれば他にもあるようだが、すべて小さい断片で確認には時間を要する。断片全体の原典は比定できていないが、これも明らかにソグド人僧侶の学習のためのものであったろう。新羅の元暁は唐に來たことはなかったものの彼の『起信論』の注釈書は、法蔵に影響を与えたことが知られており⁽¹³⁾、このソグド語仏典もそのような、中国における元暁の影響という背景に照らして見るべきであるのだろう。

注釈書という点では、『金剛般若經』の注釈書が 2 種類知られている、Yoshida (2015, p. 170), Reck (2016, pp. 399–400)。一方は長行貝葉で、タイトルは $\beta z' y m' y p r' t n y' w y \delta \beta' \gamma$ 「金剛般若（經）の解説（梵語の仮名 “Vajracchedikā-prajñā-sāstra”）」である。もう一方は短行貝葉で、タイトルは $\beta z' y m' k w y \delta \beta' \gamma$ 「金剛（經）の解説（梵語の仮名 “Vajracchedikā-sāstra”）」とある。どちらも『金剛般若經』の本文を引用して、解説する体裁をとっている。本文の引用部分は基本的に羅什訳の『金剛般若經』に一致していると考えられる上に、ソグド語の訳文の特徴などから明らかに漢文原典からの翻訳であることが分かる。二つは、注釈対象の『金剛般若經』の本文に互いに重なり合う部分がないので、同じ注釈書の異なる写本なのか、異なる 2 種類の注釈書なのか分からない。いずれにしてもこのような注釈書は僧侶の研学用であり、一般信者用だったとは考えられない⁽¹⁴⁾。

(11) ここに音写された中国語の発音自体は 8 世紀前半の長安の標準音であると考えられ（吉田 1994, Yoshida 2023）、辺境の仏僧が学習する意味があったのかもしれない。

(12) 上でこの写本の断片の総数を 50 点としているが、実際には 51 点確認されていることになる。

(13) 元暁の事績および法蔵が元暁の注釈書を利用したことについては、石井 (2023) を参考にした。

(14) 『金剛般若經』の注釈書は多いが、電子検索してみる限り、『大正大藏經』に収録されている注釈書には比定できないようである。

また別のグループは、Reck (2016, pp. 404–405) に Vinaya-artige Textfragmente として収録されている。こちらはその一部に『大寶積經』の「寶梁聚會 Ratnarāśi-sūtra」のソグド語訳が含まれていることを筆者は発見している、Yoshida (2015, pp. 170–171). Ratnarāśi-sūtra も僧侶の生活規範を扱う仏典であり、ターゲットは在家信者ではなく出家者であった。そして筆者は最近、このグループに属する断片の So 18099 が、『四部律并論要用抄』（『大正』 vol. 85, no. 2795）の翻訳を含んでいることを発見した。これも僧侶用の戒律に関わる仏典である。中国仏教界において中国人仏僧の中にいたソグド系の僧侶たちは、独自の僧団を形成していたという証拠は何ら存在しないだけでなく、四川の神会や法蔵、曇曠の事績を見ればむしろ中国人僧侶と何ら変わりなかったように見える。しかしその実、少なくともトルファンでは、自分たち専用にソグド語訳された仏典を作って利用していたらしい⁽¹⁵⁾。現在の資料状況では、これがトルファンに特殊な事態であったのか、トルファンすなわち唐の西州も含め、唐全土で見られたのかを知ることはできない。

2. ソグド語の律典

ソグド語仏典には、飲酒や食肉、さらには一般的な道徳や倫理を説く仏典がいくつか見つまっている。これらは典型的に一般信者に向けられている、Yoshida (2009, pp. 297–303). これらとは別に大乘の戒律である梵網經のソグド語訳、および梵網經からの引用を含む原典不明の仏典も見つかっている、Yoshida (2015, p. 173, no. 31). Karmavibhaṅga のソグド語訳もこの範疇に属するであろう、Yoshida (2019, pp. 143–148). これらは所謂 Vinaya, すなわち教団を管理するための戒律ではない。

しかし、上でも述べたように、『四分律戒本』は僧侶のための戒律の条文、すなわち Pratimokṣa のソグド語訳であって、まさに戒律である。そして本稿で紹介するのは、断片ながらソグド語で書かれた特異な広律である。「特異」というのは、ぴったり対応する原典が見つからない、あるいはむしろ筆者が見つけられないということであって、戒律の専門家がればごく普通の仏典なのかもしれない。このあたりが、断片ばかりで個々の写本の分量の少ない割には、その内容が多岐にわたるソグド語文献の研究一般に伴う問題、困難さである。内容の解明には当然ながら仏教学の深い知識が必要であり、筆者のように能力に限りのある一個人のソグド語研究者の手に余る。

そういうわけで、本稿で発表するのは、いつの日か何か興味深いことが分かるかもしれないという淡い期待から、中央アジア学フォーラムで発表してからでも 20 年近く無為に放置してあった資料である。私は昨年古稀を迎え、それでなくてもわずかな記憶力や思考力は日々に見えて衰えた。何よりも最新の研究をフォローできなくなった。研究者人生の終焉が遠くなくなって、やりかけた仕事を残したままにすることは忍びない。畏友森安孝夫教授を追悼する論文集に、老学者が中途半端な研究成果を寄稿することに対して大方の寛恕を請う所以である。なお、厚かま

⁽¹⁵⁾ 筆者が比定した禅宗の師資相承に関する所伝である『楞伽師資記』なども（吉田 2017）、一般信者が読むというより禅僧のためのものであったであろう。

しくもこの拙い論文が戒律の専門家の目に触れることがあることを期待して、論文冒頭に、一見すると不要なソグド人の仏教信仰およびソグド語仏典に関する一般論を背景知識として添えた。

3. 短行貝葉 So 10921, So 19530a, b および Mainz 155 について

ベルリンにある比較的に大きな仏教ソグド語の断片 3 点 (So 10921 = Reck 2016, no. 579; So 19530a = Reck 2016, no. 853; So 19530b = Reck 2016, no. 854) 及び極小断片 Mainz 155 (Reck 2016, no. 920) は、本来一つの写本に属する断片であった。断片に残された文言から仏典であることは明らかである。書体はソグド語仏典に普通に見られる楷書体で、破損部でなければ文字の判読は容易である。ソグド文字が横書きであったと見なした場合⁽¹⁶⁾、3 つの断片のサイズと表裏に残された行数は以下のようである。なお行間は 1.0 cm ~ 1.1 cm ほどである：

断片	横寸	縦寸	表	裏
So 10921	13,4 cm	12,8 cm	13 行	12 行
So 19530a	13,5 cm	12,9 cm	12 行	13 行
So 19530b	13,6 cm	11,9 cm	12 行	11 行
(参考) Mainz 155	2,8 cm	1,8 cm	2 行	2 行

写本の写真はすべて Digital Turfan Archiv (<https://turfan.bbaw.de/dta/index.html> [2025 年 5 月 16 日閲覧]) に公開されている。3 断片はおおよそ 13 cm x 13 cm の大きさで、形も似ている。2000 年代の初め Turfanforschung の Digitales Turfan Archiv で画像が公開された当時、So 19530a と So 19530b は、2 枚重なり合った状態でガラス板に挟んであった。後に筆者の指摘と依頼に従って、文書进行管理するベルリンの国立図書館のスタッフが、ガラス板を開けて、2 断片を分離した上で、2 つを a と b の枝番号によって区別している。ただし 3 つの断片にはこの順に鉛筆書きで、1, 2, 3 と記入されていると言い (Reck 2016, p. 113)、発見当時は 3 枚が重なった状態であったようだ。各断片には、重なり合った状態で埋もれていた (あるいは保管されていた) 時に、隣接する文書の表面の文字が写った跡が鏡文字になって残っている。下で見るように、内容から判断して、確かにこの順序で、しかも中間に別のページを挟むことなく連続して配列されていたはずである。ただし極小断片 Mainz 155 の相対的な位置は不明である。

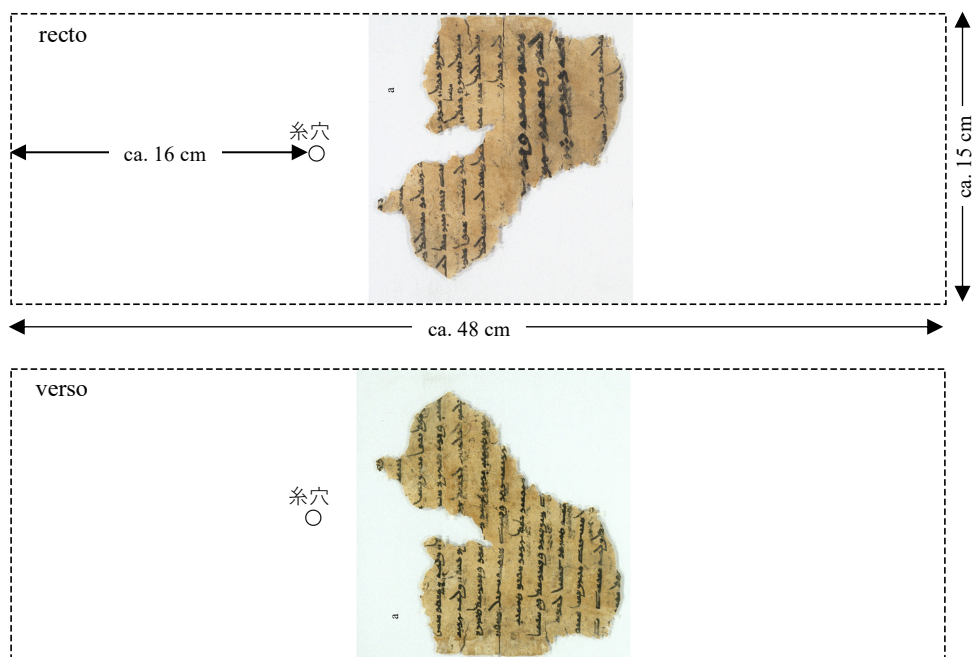
表裏の行の進み方から、これが短行貝葉の断片であったことが分かる⁽¹⁷⁾。片側のマージンが残

⁽¹⁶⁾ 5 世紀後半以降ソグド文字は縦書きされることが多かったので、この文書でも縦書きであった可能性が高い、Yoshida (2013)、吉田 (2014)。ここではソグド語研究の伝統に従って仮に横書きと見なしているに過ぎない。

⁽¹⁷⁾ ソグド語仏典の貝葉本には 2 種類存在する。細長い料紙の短い辺に沿ってテキストを書写する貝葉を短行貝葉と呼び、逆に長い辺に沿って書写する場合は長行貝葉と呼ぶ。ブラーフミー文字で横書きするインドに由来する貝葉本は、本来長い辺に沿って文字を書写する。ソグド文字が縦書きに移行してから貝葉本に書写することになったソグド人は、大きい料紙にテキストを書写する際に、短い辺に沿って書写する方式を導入したようだ。ただし料紙が小型であれば、長い辺に沿って書く。このように短行貝葉はソグド語仏典に始まり、後にウイグル語仏典やモンゴル語仏典に受け継がれた。短行貝葉と洋装本 (folio 本) では、表裏の文字の進み方は同じになるので、断片となり紐穴が残されない場合、どちらのタイプの写

っているが、もう一方のマージンは破損している。また上端と下端（縦書きとみなせば左端と右端）も破損している。短行貝葉の1行の長さが13 cm以上あったわけであるから、かなり大きな貝葉本であったことが分かる。この種の短行貝葉写本は、高さが1尺の中国紙を長い辺に沿って半分に切断して料紙にしていることが知られている。敦煌で出土する Vessantara Jātaka はその典型で、一貝葉は 14.8 cm x 47.8 cm 程度になっている⁽¹⁸⁾。3つの断片が所属する貝葉本もほぼ同じ大きさであったと考えられる。ソグド語の行と直角の交差する漉き縞が見えていることも、中国紙を半截したことを示す証拠として参考になる。Vessantara Jātaka の場合、上（縦書きとみれば左）端から 16 cm 程のところに糸を通す穴が確認できる。穴の位置が端から 3 分の 1 ほどの場所にあった Vessantara Jātaka とほぼ同じであったとすれば、3つの断片は穴の下側（縦書きとみれば右側）にあったと考えるのが妥当であろう。残された3断片には糸穴の痕跡が見えないからである⁽¹⁹⁾。今仮に So 19530a が属していた短行貝葉を復元すると、以下のようなイメージになるだろう。

So 19530a 第 n+1 葉⁽²⁰⁾



本か判断できないことがある。しかし、本文書は仏典であり、folio 本の可能性は容易に排除できる。

(18) Pelliot sogdien 2 および Pelliot sogdien 3 もほぼ同じサイズである。

(19) 仮に長い辺が 48 cm ほどであったと考えれば、端から 16 cm 程の所に穴があったはずである。断片に残されている 13.5 cm ほどと上端（あるいは左端）にあったはずの 1.5 cm ほどの余白部分を合わせると 15 cm になる。厳密に考えれば、糸穴の左側にあったと推定することも全く不可能ではない。しかし、通常糸穴の周りは空白部になっているものの、これらの断片では空白部は確認できないから、これらの断片が穴の上（或いは左）に位置していた可能性は低い。いずれにしても、糸穴のどちら側にあった断片であるかは、文書の内容の理解に全く影響しない。

(20) 貝葉の上端（或いは左端）のおそらくオモテ面には葉数が書いてあったはずである。具体的な数は不明なため、ここでは仮に最初の貝葉を「n 葉」と呼び、続く2葉を「n+1 葉」、「n+2 葉」とする。

この復元図から明らかになるように、各断片間及び各断片の表裏の間で失われているテキストの分量は非常に大きい。仮に長さが 48 cm ほどだったと推定し、両端の欄外に各 1.5 cm の空白部を想定すれば、文字を書くスペースは 45 cm ほどであった。行間は 1.0 cm ~ 1.1 cm ほどなので、そこには 40 行以上書かれていたであろう。仮に 1 ページに 42 行書かれていたとすれば、各断片間には 30 行ほどの破損部が存在したことになる。しかも各断片の片方のマージンは破損しているから、現在残っている部分のテキストは、本来の貝葉の 5 分の 1 にも満たないであろう。

それでは次にテキストの内容を見てみよう。既に吉田 (2007) 及びそのドイツ語版 Yoshida (2008) で述べたように、I. Yakubovitch 博士は、ソグド語訳の『僧伽吒経』について筆者と共同研究を行っていた際の情報交換の過程で、So 10921 のウラ面に見える *cwry pnt'kk* と読める語を、梵語仏典にあらわれる人名の *Cūḍa-panthaka* 「周利槃陀迦, etc.」に比定し、この断片が根本説一切有部の律典に比較できる可能性を指摘した。この指摘に導かれて、当時まだ 2 断片が重なったままになっていた So 19530 を、*Turfanforschung* のスタッフに依頼して分離していただいたところ、従来見えていなかった面 (So 19530a n+1 葉 recto) に、Yakubovitch 博士の推定を証明する文言が見つかった。すなわち、8 行目から 10 行目にかけて、他の部分より大きい文字で、第 22 波逸提⁽²¹⁾が後続することを示す見出しが書かれていた⁽²²⁾。

8	<i>xwyr-tx'yȳ prm (š)[mn'nct?</i>	日没まで [尼僧に(?)]
9	<i>δrm prβ'yry šk[š'pt</i>	法を説明する戒 [律]
10	<i>22-myk' ♦⁽²³⁾</i>	22 番目

例えば『根本説一切有部毘奈耶 (『大正』 vol. 23, no. 1442)』によれば (vol. 23, p. 803c24), 第 22 波逸提は「教授苾芻尼至日暮學處第二十二」, また『四分律比丘戒本 (『大正』 vol. 22, no. 1429)』でも、第 22 波逸提は「若比丘。爲僧差教授比丘尼。乃至日暮者。波逸提 (若し比丘。僧に差せられ。比丘尼を教授し。乃ち日暮に至る者は波逸提なり⁽²⁴⁾)」 (vol. 22, no. 1429, p. 1018c 12-13) とあって、この二つの律典では第 22 波逸提は日没まで尼僧に説法することにかかわるものであった。

僧侶の戒律を扱う文書としてはベゼクリク出土の 3 断片 (80 TB I 552 甲 + 80 TB I 558, 80 TB I 580) が知られている。ただしこちらは戒律の条文だけを列挙した『四分律比丘戒本』 (『大正』 vol. 22, no. 1429) あるいは『四分僧戒本』 (『大正』 vol. 22, no. 1430) の翻訳である。これに対して

(21) 波逸提とは「比丘・比丘尼の具足戒を類別したもの一つで、軽罪の一つ。地獄に堕ちると解されている。しかし懺悔すれば許される」(中村元『仏教語大辞典』東京書籍, 1981, p. 1091c)。ソグド語仏典では *p'yty* (本写本) の他に *p'ytk*, *p'ytyk* という形式も知られている, Yoshida (2010, pp. 90, 92, n. 13)。インド語には種々の形式が知られているが、ソグド語に借用された形式は、そのうちの *pāyattika* に近い。漢語の形式である波逸提の影響もあったかもしれない。

(22) 見出しだけなら第 22 波逸提の末尾に置かれていた可能性もあるのだが、見出しに先行する部分に残された文言から、第 21 波逸提がそこで終わっていることが容易に理解される。

(23) ♦ は、小さな菱形 4 つを菱形型に配置した特別の形の句読点であることを示す。o や oo は、太く短い縦棒 1 本あるいは 2 本から成る句読点であることを示す。

(24) 本稿では原典の読み下し文を『国訳一切経』から引用している。

So 10921 等の方は, cwrw pnt'kk が残されていることから分かるように, 戒律の成立背景を説明する部分を含んでいる所謂広律の翻訳であったように見える。参考までに従来知られている広律と所属部派および訳出年代などを下に列挙する⁽²⁵⁾：

- (1) パーリ律
- (2) 『五分律』(弥沙塞部；『大正』 vol. 22, no. 1421；全 30 卷) 423～434 年 ※法顕将来
- (3) 『四分律』(法藏部；『大正』 vol. 22, no. 1428；全 60 卷) 410～412 年
(3-1) 『四分律刪繁補闕行事鈔』(『大正』 vol. 40, no. 1804；全 12 卷) 626～630 年
※上記 (3) の道宣による解説書
- (4) 『摩訶僧祇律』(大衆部；『大正』 vol. 22, no. 1425；全 40 卷) 416～418 年頃 ※法顕の翻訳
- (5) 『十誦律』(説一切有部；『大正』 vol. 23, no. 1435；全 51 卷) 404～409 年
- (6) 『根本説一切有部毘奈耶』(『大正』 vol. 23, no. 1442；全 50 卷) 702/704 年
- (7) 『鼻奈耶』(『大正』 vol. 24, no. 1464；全 10 卷) 382/383 年

次節の校訂・注釈でも示すように、断片に残された文言から、漢訳で残された広律の中では (3)『四分律』に近く、その第 20 波逸提から第 20 波逸提までに対応することが明らかになった。ただ『四分律』の解説である道宣の (3-1)『四分律刪繁補闕行事鈔』と並行するに見える部分もある。また、(6)『根本説一切有部毘奈耶』にだけ存在する文言に一致する箇所も見られ、このソグド語律典が、何らかの原典からの翻訳か、ソグド人の仏教僧侶による編集によって成立したものか、今のところ判断できない。本論文のタイトルで「ソグド語の奇妙な広律」と呼ぶ所以である。トルファンにいたソグド人僧侶がどのような律典を使っていたかを知るためには、3 断片に残された部分が全体のごくわずかであることが悔やまれる。

4. テキストと翻訳および注釈

以下に4つの断片のテキストと翻訳及び訳注を提出する。

So 10921 n 葉 recto

テキスト

- 1 [](-)[]
2 [] <blank> []
3 [c'wn ctβ'r '](n)β'nt(y ywny?) škš('pt ')[nxw-]
4 [yt 'yw c'w]n xy(p)[δ γryw](h) pyδ'r x'n' wn't oo []
5 δβty 'nyw ''δy w'β't krpyc δysy oo št'ykw []
6 c'nw 'δry 'rs' L'pty'mty β't oo ct(β) ['rmyk]
7 c'nw 'δrv 'rs'pty'ms't c'wn xyδ[wy'k L?]

(25) ここでの記述はおおむね鎌田茂雄ほか編『大蔵経全解説大事典』（雄山閣、1998）に依っている。

- 8 pw'rt't p'yty γw'n byrt # c(t)[β'r?]
 9 w'nw prβ'yrt c'nw 'δw' 'r(s)[']
 10 tymn n' 'γ'st β't sty(w)[]
 11 (p)yšt 'δry 'rs' 'γš(t)[]
 12 [']kw L' wyn L' ptγ[wš wy'k]
 13 [](n) c'nw (ctβ)['r]

翻訳

「…………… [4つの] 縁で、この(?)戒律を [犯す、第1に自分自身] のために家を作る場合、第2に他の誰かにレンガを築くように言う場合、第3に、3つの層(?)が完成していない場合、第4に、3つの層(?)が完成して、その [場所(?)] から離れ [ない] 場合、波逸提の罪を得る、4つの……………次のように説明する、2つの層……………まだ始まっていないなら……………とはいえ……………しかし3つの層 (の建設) が始まって……………見ることがない、聞くこともない [場所(?)] に……………4つの……………する場合……………」

注釈

この部分は、第20波逸提の説明である。『四分律比丘戒本』では「若比丘作大房、戸扉窓牖及餘莊飾具、指授覆苫齊二三節、若過者波逸提 (若し比丘、大房、戸扉、窓牖及び餘の莊飾具を作り、指授して苫を覆ふこと二三節^{かぎ}を齊る、若し過ぐれば波逸提なり)」(『大正』vol. 22, p. 1018c11-12) とある。比丘が家を作るときの装備に関わっている。波逸提では「苫^{とま}」とある語がソグド語のテキストでは krpyc となっている。この語は初出だが、Reck (2015) によってウイグル語の kārpič 「レンガ、屋根瓦」と同じ語である事が明らかにされた。おそらくソグド人の生活環境に合わせて、この語が選ばれたのであろう。'rs' も初出である。文脈から瓦あるいはレンガを積んで何層 (あるいは階層) にするかが問題になっているのであろう、Reck (2015)。ここでは「層」と翻訳してみた。『四分律比丘戒本』(および『四分律』) では「節」に対応している。

『四分律』では、この波逸提が成立するきっかけになったエピソードを説明したあとで、釈尊が波逸提の文言を語る：「若比丘作大房舍、戸扇窓牖及餘莊飾具、指授覆苫齊二三節、若過波逸提」(『大正』vol. 22, p. 647a22-24)。これに続いて波逸提の文言に関する次のような詳しい解釈や解説の部分が続き、第20波逸提の項目は終わる。少し長いがソグド語のテキストとの関連で引用する。

647a24 比丘義如上説。大舍者多 a25 用物及餘莊飾者刻鏤彩畫。覆者有二種 a26 縱覆横覆。彼比丘指授二節覆已。第三節未 a27 竟當去至不見不聞處。若比丘二節覆已。 a28 第三節未竟不去至不見不聞處。若第三節 a29 竟波逸提。若捨聞處至見處。捨見處至聞 b01 處。一切突吉羅。比丘尼波逸提。式叉摩那 b02 沙彌沙彌尼突吉羅。是謂爲犯。不犯者。指授 b03 覆苫二節竟。至第三節覆未竟至不見不 b04 聞處。水陸道斷賊難諸惡獸難水大漲或爲 b05 力勢所持若被繫若命難若梵行難。指授覆 b06 二節至第三節未竟不去至不見不聞處 b07 無犯。無犯者。最初未制戒。癡狂心亂痛惱 b08 所纏二十竟

「比丘の義は上に説くが如し。大舎とは、多く物を用ふるたり。餘の莊飾とは、刻鏤彩畫なり。覆ふとは二種あり。縦覆と横覆なり。彼の比丘二節覆を指授し已り、第三節未だ竟らざるに、當さに去りて不見不聞處に至るべし、若し比丘二節覆已り、第三節未だ竟らざるに去りて不見不聞處に至らず、若し第三節竟れば波逸提なり。若し聞處を捨てて見處に至り、見處を捨てて聞處に至るは一切突吉羅なり。比丘尼は波逸提、式叉摩那・沙彌・沙彌尼は突吉羅なり、是れを謂つて犯と爲す。不犯とは、指授して苦二節を覆ひ竟り、至第三節覆未だ竟らざるに至り、不見不聞處に至る。水陸道斷じ、賊難、諸惡獸難あり、水大に漲る。或は力勢の爲に持せらる、若しは繋がれ、若しは命難、若しは梵行難ありて、指授して二節を覆ひ、第三節未だ竟らざるに、去りて不見不聞處に至らざれば無犯なり。無犯とは、最初に未だ戒を制せざると、癡狂と心亂と痛惱所纏となり。二十竟わる」

残された語句から判断して、ソグド語のテキストはこの部分に対応しているように見えるが、逐語訳ではない上に、かなり省略した翻訳であるように見える。その一方で、5行目の $\delta\beta ty$ 「第2」、 $\dot{s}t'ykw$ 「第3」、6行目の $ct(\beta)[rmyk]$ 「第4」のような序数詞は『四分律』には見当たらない。ところがこの部分には、『四分律刪繁補闕行事鈔』（『大正』vol. 40, no. 1804, p. 78b27–c1）に、以下のような並行する箇所が見つかる。

78b27 覆屋 b_{28} 過三節戒二十。四縁⁽²⁶⁾。一自爲己。二自作使人 b_{29} 覆。三至第三節。未竟不去見聞處。四至三節 c_1 竟犯。

「屋を覆ふに三節を過ぐる戒二十。四縁あり、一には自ら己が爲にし、二には自ら作し人をして覆はしめ、三には第三節未だ竟らざるに至りて見聞處を去らざる、四には三節竟るに至りて犯す」

ソグド文では、これに対応する部分は8行目の $p'yty \gamma w'n \beta yrt$ 「波逸提の罪を得る」で終わる。それに続く残りの部分は、破損が激しくて文脈を復元できないが、先行する4つの項目を説明しているのであろう。『四分律刪繁補闕行事鈔』にはない $'\delta w' 'rs'$ 「2つの層」が9行目に見える。それに対応するはずの「二節」は、上で引用した『四分律』には4箇所(a26, a27, b03, b06)に見える。どの場合も $'\delta ry 'rs'$ に対応する「三節」や、 $L'wyn L'pty[wš]$ に対応する「不見不聞處」が続いている。確かにこの部分と関連しているらしいが、今のところそれ以上のことは分らない。

So 10921 n 葉 verso

テキスト

- | | | | |
|---|---|---------------------------------------|---|
| 1 | [| $xy\delta s[$ |] |
| 2 | [| $\dot{s}](m)nt' xy\delta ct(\beta)[r$ |] |
| 3 | [| $(. r)x'nt \dot{s}mn'ncth pt[yc$ |] |

(26) ソグド文3行目の $'n\beta'nty$ はこの「縁」に対応している。この部分は下で見る So 19530b recto の文言 ($c'wn wxwšw wkry 'n\beta'nty ywny \dot{s}kš'pt 'nxwyt$ 「6つの因縁によってこの戒律を犯す」) が参考になる。

- 4 [sr]δm'n βnt pyšt wxwšw šmn'n(ct)h βr'γ'z'nt
 5 [sx]'nt't wyδp't cwrypnt'kk γrβ' xyδ xiiii iiii
 6 [wkry? mz'yx?](p)rn z'wr wyn'ncyk wnt' p̄srδ 'kw cytβn
 7 [snkr'm s'](r) wytr oo wyδ zmnw wxwšw šmnt' δ('wn)
 8 [wxwšw šmn'nct](h) pr'yw nβ'yr'nt 'ys'nt 'kw --
 9 []wy'ks'r prw škš'pt ywk ZY
 10 [wxwšw š](m)nt' 'nyw L' prβ'yr'n(t)
 11 [pw p]δ(k)y L' šyry w'xš wxwš[w]
 12 [(t p)yšt rx'nt šmn[t'']]

翻訳

「……その……沙門たちはその 4 つの……阿羅漢の比丘尼たちの〔面前で(?)〕……彼らは喜んだ。しかし 6 人の比丘尼たちは〔嘲り笑い〕始めた。その時 Cūḍapanthaka (周利槃陀迦) は (そのことを) 理解し、すぐに 18 の神通力を現した。それから祇園〔精舎〕に行った。そのとき 6 人の比丘たちは〔6 人の比丘尼〕とともに相談した。(そして) ……場所に戒律や教義……〔を教える〕ためにやってきた。(しかし 6 人の) 比丘たちは……〔非〕法の良くない言葉より他のことは教えず、6 [人の] ……しかし阿羅漢の比丘〔たちは〕……」

注釈

この部分には Cūḍapanthaka (周利槃陀迦) が現れることから、第 21 波逸提が成立することになった話が語られていることが判明する。その波逸提は『四分律比丘戒本』では「若比丘僧不差。教誡比丘尼者。波逸提 (若し比丘僧差さざるに、比丘尼を教誡する者は波逸提なり)」(『大正』 vol. 22, p. 1018c13) とある。ここでは、Cūḍapanthaka が比丘尼たちを教誡し、みんな喜んだが、六群比丘尼は不満で、そのことを悟った Cūḍapanthaka が神変を現したあと祇園精舎に帰ったことと、それに続いて六群比丘たちが六群比丘尼たちと謀って、彼ら自身が比丘尼たちを教誡する算段をしている様子が描写されているように見える。ソグド語の文に並行する箇所は、『四分律』でも、ほかの広律にも見つからなかった。ただ 5 行目に見える数字の「18」は、『根本説一切有部毘奈耶』(『大正』 vol. 23, p. 797c24) に愚路すなわち Cūḍapanthaka が、自分を軽蔑する比丘尼たちに 18 の神変を現したとあることと関連しているに違いない。『四分律』には尊者般陀すなわち Cūḍapanthaka が神変を現したことは見えるが、この数字は見当たらない。ソグド語のテキストの成立と関わって興味深いのが、今のところその背景は分からない。

ちなみに『四分律』のテキストと一致しているように見える表現を列挙しておこう。全文を引用するには分量が多すぎる。対応箇所を比べるとソグド語版がずいぶん短くなっていることが知られる。

4 [sr]δm'n βnt

647c29 大歡喜

5 γrβ'

648a10 我今觀

6	prn z'wr wyn'ncyk wnt'	648a16-17	現此衆變
6-7	ptsrδ 'kw cytβn [snkr'm s'](r) wytr	648a17	即於空中而去
7-8	wyδ zmnw wxwšw šmnt' δ'wn [wxwšw šmn'nct](h) pr'yw nβ'yr'nt	648a17-18	爾時六群比丘遺信語六群比丘尼言
9-10	prw škš'pt ywk ZY []	648a19	教誡說法
10-11	[wxwšw š](m)nt' 'nyw L' prβ'yr'n(t) [pw p]δky L' šyry w'xs[w]	648b9-10	六群比丘……乃說餘事。亦不與說 戒論定論

6 行目の prn z'wr は『四分律』の「変」に対応しているように見える。神通，神変のことである。「神通」は『仏説観仏三昧海經』のソグド語訳の 310 行目では prn 't wrcwny と表現されている，MacKenzie (1976, p. 62). この場合 prn z'wr 全体が「神通」を意味しているのか，prn が「神通」を表し，prn z'wr は「神通力」を表しているのか判断が難しい。ここでは prn z'wr が「神通力」を表していると思なした。

8 行目の nβ'yr'nt は現在形の形式だが，文脈から未完了形 *nyβ'yr'nt の誤写だと考えて翻訳している。

11 行目の [pw-p]δ(k)y については未発表文書 So 10701(e) の a 面 4 行目の pw-pδky (adj./noun) 'without law, non-law' を参照せよ。

So 19530a n+1 葉 recto

テキスト

- 1 [](.) y[]
- 2 [šmn](')nc(t)[h]
- 3 [tr-zmn]w šw't ZY nw'yδ't s['t]
- 4 (γ)w'nkry βwt oo nymy y(w)[cn z]'yh ryty nyzy γwt L'[]
- 5 nyz't twškr a {γw'n} βwt oo [rty kδ'? r]'δy mz'yx 'p 'ys(')[t]
- 6 r'δ βyδ't 'nyw 'nt(w)[x](c) β't styw L' nw'yδ't[γw'n]
- 7 L' βwt ❖
- 8 ^bxwyr-tx'yž prm (š)[mn'ncth]
- 9 δrm prβ'yry šk[š'pt p'yty?]
- 10 22-myk' ❖
- 11 <blank>
- 12 wyδ'γty βc'npδ(y) xwy(št)[r
- 13 [cytβ](n snkr)[*m

a: この語は 4 行目と 5 行目の行間に小さく挿入されている。語が脱落していることを示すために，twškr と βwt の間の下（縦書きとみれば右側）にプラス記号（+）のような記号が書き込まれている。b: 第 8-10 行は肉太の大きな文字で書いてある

翻訳

「……比丘尼たち……[時ならず] 行く場合や招待する（或いは：出迎える?）場合、すべて罪がある。半由旬の距離まで面前に出る必要がある。出なければ突吉羅⁽²⁷⁾の罪がある。

[もし] 途中に大水が来て、道路が塞がれる、あるいは他の難儀があるなら、招待（或いは：出迎え）しなくても[罪は] ない。

日没まで[比丘尼たちに] 法を説く戒律。[波逸提] 第 22。

その時世尊は[舍衛国の祇] 園精[舎に滞在していた] ……」

注釈

第 21 波逸提に対応する部分の最後と、大きく書かれた第 22 波逸提の見出し、および本文の冒頭である。見出しの部分と第 22 波逸提の冒頭は容易に解釈出来る。ちなみに『四分律比丘戒本』では、その波逸提を「若比丘。爲僧差教授比丘尼。乃至日暮者。波逸提（若し比丘。僧に差せられ、比丘尼を教授し、乃ち日暮に至る者は波逸提なり）」（『大正』 vol. 22, p. 1018c14–15）と表現している。一方先行する部分は、『四分律』の第 21 波逸提の末尾と部分的にしか合致しない。上でも指摘したように、ソグド語のテキストは『四分律』の本文と比較すると相当節略した抄訳のようになっているように見える。下に第 21 波逸提の末尾の部分（『大正』 vol. 22, p. 649b20–c03）を引用した。

649b20 若比丘尼言一以任僧處分者。爾時即^{b21} 當於常教授人中隨次差往。衆僧當剋時^{b22} 而往。比丘尼亦當剋時而迎。時比丘尼聞教^{b23} 授師來。當出半由旬迎。安置坐處辦洗浴^{b24} 具。辦粥種種飯食。若衆僧所差至集會日^{b25} 與說八不違法。應次往與說法。若衆僧病。比^{b26} 丘尼遣信禮衆僧。衆僧不滿別部不和合^{b27} 遣信禮。若比丘尼病若衆不滿不和合。亦^{b28} 遣信禮拜問訊衆僧。若水道留難道路嶮難^{b29} 賊盜虎狼師子河水暴漲力勢所持。若被繫^{c01} 閉命難梵行難。不容遣人禮拜問訊。如此^{c02} 等無犯。無犯者。最初未制戒。癡狂心亂痛^{c03} 惱所纏二十一竟

「若し比丘尼一に以て僧の處分に任ずと言はば爾の時即ち當さに常の教授人の中に於いて、次に随つて差して往かしむべし。衆僧當さに時を剋して往くべし。比丘尼も亦當さに時を剋して迎ふべし、時に比丘尼教授師來ると聞かば、當さに半由旬を出でて迎へ、坐處を安置し、洗浴具を辦じ、粥と種種の飯食とを辦ずべし。若し衆僧に差せらるれば、集會の日に至り、ために八不違法を説き、應さに次ぎに往いてために說法すべし。若し衆僧病まば、比丘尼信を遣はし衆僧を禮せよ、衆僧滿ぜず、部を別ちて和合せざれば信を遣はし禮せよ。若し比丘尼病み、若しは衆滿ぜず、不和合なれば、亦信を遣はし、衆僧を禮拜問訊せよ。若しは水道留難・道路嶮難なる、賊盜・虎狼・師子あり、河水暴漲、力勢に持せらる、若しは繫閉せらる、命難・梵行難ありて、人を遣はして禮拜問訊すべからず。此の如き等は無犯なり、無犯

(27) 突吉羅（ときら）は「悪作と漢訳。最も軽い罪で、一人に対し、あるいは自己一人で懺悔するもの。五篇羅の一つ」（中村元『仏教語大辞典』東京書籍、1981, p. 995b）。インド語の原語は Pali dukkaṭa, Skt. duṣkṛta。ソグド語の twskr は、梵語由来らしいが何故か末尾の t が脱落している。

(29) この読みと解釈が正しいとすると、ここに「律」を意味する語が使われるのは奇妙に思える。ただし『四分律刪繁補闕行事鈔』には、対応する「與尼說法至日暮戒二十二」のところに「律中除教授。若受經誦經（律中に、教授を除いて若しは經を受け經を誦し）」（『大正』vol. 40, p. 78c8）が見えている。

ある。もし在家の女の〔教授(?)〕のために $\delta\beta\delta'y\varsigma$ を与えれば、それもまた突吉羅である。もし比丘尼が日暮れに比丘の僧伽藍に到着すれば突吉羅〔の罪がある。〕比丘尼たちのあり方も同様である。〔もし……〕会合があるなら、比丘は日暮れに……僧伽藍に到着するなら、無罪〔である。〕……法から $n'-txšty$ ……もし船……戒律を……応接……」

注釈

残された部分には $xwyr-tx'y\zeta$ 「日暮れ」が何度か現れており、verso 全体が第 22 波逸提にかかわる部分であることは明らかである。またこの波逸提の前半は難陀が比丘尼に教授したエピソードが語られるが、この断片に残された部分はそのエピソードに続く一般的な説明であることも明らかである。12 行目の $n'w'h$ が、筆者が推定する通り $n'w$ 「船」のヴァリエント形、あるいは $n'w$ から派生した語で、「船着き場」を意味する語であるとすれば、確かに『四分律』の該当部分に「若船濟處」(『大正』vol. 22, p. 650a22) という表現が見えている。この推定が正しいという前提で、『四分律』の第 22 波逸提の項目の終わりの部分を引用する。ソグド文に対応すると思われる語句には下線を添えた。ただ対応は非常に曖昧である。

650a12 若比丘教授比丘尼^{a13}乃至日暮者波逸提。除教授若受經若誦經^{a14}若問若以餘事乃至日暮突吉羅。除比丘^{a15}尼已若爲餘婦女誦經若受經若問若以餘^{a16}事至日暮突吉羅。若日暮日暮想波逸提。^{a17}日暮疑突吉羅。日暮不日暮想突吉羅。不日^{a18}暮日暮想突吉羅。不日暮疑突吉羅。比丘尼^{a19}突吉羅。式叉摩那沙彌沙彌尼突吉羅。是謂^{a20}爲犯。不犯者。教授比丘尼日未暮便休。除^{a21}婦女已若爲餘人若教誦經受經若問若^{a22}以餘事不犯。若船濟處說法比丘尼聽。若^{a23}與賈客共行夜說法。若至比丘尼寺中說^{a24}法。若說戒日來在衆中請教授人值說^{a25}法便聽無犯。無犯者。最初未制戒。癡狂心^{a26}亂痛惱所纏二十二竟

「若し比丘、比丘尼を教授し、乃ち日暮に至れば波逸提なり。教授を除いて、若しは受經、若しは誦經、若しは問ひ、若しは餘事を以て乃ち日暮に至れば突吉羅なり。比丘尼を除き已りて、若し餘の婦女の爲に誦經、若しは受經、若しは問ふ、若しは餘事を以て日暮に至れば突吉羅なり。若し日暮に日暮想は波逸提なり、日暮の疑は突吉羅。日暮に不日暮想は突吉羅なり、不日暮想に日暮想は突吉羅なり。不日暮の疑は突吉羅なり。比丘尼は突吉羅、式叉摩那・沙彌・沙彌尼は突吉羅なり、是を謂つて犯と爲す。不犯とは、比丘尼に教授し、日未だ暮れざるに便ち休む、婦女を除き已りて、若しは餘人の爲め、若しは誦經・受經を教へ、若しは問ひ、若しは餘事を以てするは不犯なり。若しは船濟處に說法せんに、比丘尼聽く、若しは賈客と共に歩いて夜說法す、若しは比丘尼寺中に至りて說法す、若しは説戒の日、來りて衆中に在り、教授人を請ひて說法するに値ひ、便ち聽くは無犯なり。無犯とは、最初に未だ戒を制せざると、癡狂と心亂痛惱所纏となり。二十二竟」

オモテ面同様一致は部分的であるだけでなく、5-7 行目の、比較的意味が明瞭な「もし比丘尼が日暮れに比丘の僧伽藍に到着すれば突吉羅〔の罪がある〕」に対応する文は『四分律』には見えない。この規則は比丘尼に対する禁止条項になるので、この場所で言及されるのは不思議であ

る。この仏典を編集したソグド人の独創であったのかもしれない。そのような可能性が想定できるなら、ソグド人僧侶の仏教学の知識について従来とは異なるイメージをもって臨まなければならないだろう。

ここにはまた初出の意味の分からない語が2語ある。5行目の $\delta\beta\delta'ys$ と 10行目の $txšty$ である。 $\delta\beta\delta'ys$ は比丘が在家の女性の教化のために与えるものと考えられる⁽³⁰⁾。数詞の $\delta\beta$ -「2」と $\delta'ys$ 「教え、指示」の複合語なのかもしれない。 $\delta y\beta z\beta'k$ 「二枚舌の」のような語があるので、互いに矛盾する二つの教えを意味するだろうか。 $txšty$ のほうは動詞の過去分詞のようだがよくわからない。 $t's$ 「切る」の過去語幹だろうか。その場合は「法から切り離されない」という程の意味になるが、『四分律』には対応する表現はないように見える。

So 19530b n+2 葉 recto

テキスト

- | | | |
|----|---|--------------------------------|
| 1 | [| (w)rt šm[mn'ncth] |
| 2 | <[blank]> š]kš[']pt |](δ)rm prβ'yr't xyδ p(')[yty] |
| 3 | <[blank]> γw'nkry βw(t)[] | <[blank]> c'wn wxwšw wkr(y)[] |
| 4 | 'nβ'nty ywny škš'(p)[t 'n](x)wyt oo 'yw 'myn pwrn(kt)[y?] | |
| 5 | βyr'mnty βwt oo δβ(t)[y] | c'wn δrm pwδ'y ywc(')[mnty?] |
| 6 | c'wn wr' sp's prwyδy m'n oo št('y)[k |] |
| 7 | ZY mnk p'zn 'nx'yz't oo ctβ('r)[myk |] |
| 8 | zyk' w'β't oo pncmy (s)βr'c(k)[|] |
| 9 | (p)yrnmnmcyk ^(sic) šmny ptywš'(t)[| L'?) |
| 10 | βyrt oo pyšt kδ' w'xš m[| c'wn?] |
| 11 | [wr](') sp's m'n pyδ['r |] |
| 12 | [|](.)[|

翻訳

「……（もし）比丘尼に戒律……法を説くならば波逸提の罪になる。6種の因縁の故にこの戒律を犯す。第1は僧伽の利益（ため）である。第2は法や菩提を教えることによって利益（と）供養を求める心（のため）。第3は……と競争心を起こすことになる（ため）。第4は……傷つけることを言うことになる（ため）。第5は言葉（のため）……[第6は]……以前の比丘が聞くことになる（ため）……[罪]を得[ない]。しかしもし、言葉が[真実で]利益と供養（を得ようとする）心のために……」

⁽³⁰⁾ Reck (2016, p. 287) は、この断片に見える不明語として、 $txšty$ と $z'w'h$ (筆者の $n'w'h$) をあげるのみで、 $\delta\beta\delta'ys$ については触れていない。彼女には不明の語ではなかったのかもしれない。ただ筆者は寡聞にして在証例を知らない。なお、 $z/n'w'h$ の初頭の文字には、補助記号がないので、 z の可能性は低い。この写本では文字 z は補助記号によって文字 n と区別されているからである。

注釈

この部分は、第 23 波逸提に対応する。波逸提が成立した経緯のエピソードは、六群比丘が、比丘尼に教授して飲食を得た比丘を誘って、「飲食のために教授した」と非難したことを、釈尊が戒めたことであった。その波逸提は、『四分律僧戒本』では「若比丘語餘比丘。作如是語。諸比丘爲飲食故。教授比丘尼者。波逸提（若し比丘。餘の比丘に語りて是くの如きの語を作す。諸比丘飲食の爲の故に比丘尼を教授すとは波逸提なり）」（『大正』 vol. 22, p. 1018c16–17）とある。ただし、序数詞を伴って 6 項目が列挙されているこの部分は、『四分律刪繁補闕行事鈔』（『大正』 vol. 40, p. 78c13–17）にほぼ並行する箇所がある。下に引用する。

78c13 譏教尼人戒二十三。c14 六縁。一是僧差。二情存爲法。三内心嫉忌。四 c14 說爲飲食。五言了。六前人聞知。不犯者。其事 c15 實爾。爲供養故。教授誦經受經。若問若戲若 c16 錯一切不犯。

「譏教尼人戒二十三。六縁あり、一には是れ僧に差せられ、二には情存りて法と爲す（情法の爲に存し）、三には内心に嫉み忌む、四には飲食の爲にすと説き、五には言了、六には前人聞知するに（犯す）。不犯とは、其事實に爾り、供養の爲の故に教授し誦經し受經し、若しは問はれ、若しは戲、若しは錯なるには一切不犯なり」

この場合も So 10921 recto と同様一致は完全ではなく、ソグド文の編者の改変によるものであろうが、その詳しい事情は不明とせざるを得ない。

So 19530b n+2 葉 verso

テキスト

- 1 [](r)'m'n(t)[]
- 2 [pc]γ'zy nw'yδ'y 'zw L' [](.)[]
- 3 [(n)β'nt nβ'nt nw'yδt s[kwn yw](r)'zw L' pcγ'z
- 4 ['m? rt](y)'kδry mn' s'st [ywn](y?) nγ(?)wδ(n) šmn'ncy
- 5 [pcγ'zy nw'y](δ)[']w styw 'wyn šmn'nc(h) L' ''stk'm
- 6 [x](y)pδ pδkh 'krty βwtk'm o rtšy
- 7 [šmn'ncy pcγ'zy nw'ystδ'rm r]ty 'ytδ'rt mwnw sβr'ckh
- 8 [snkr](')my šmnt' pt'yγwš'nt
- 9 ['p](r)s'nt ckn'c pyδ'r šmn(y)
- 10 [](L)['?] δβrty prw pcγ'z nw'y
- 11 [δ'y?](. . . pt)[]

翻訳

「……常に……（比丘尼は私に招待を）受けるように勧めていたが、私は〔受け〕なかった。……（この比丘尼は）次から次へと（私に受けるように）勧めている。しかし私は受

けていない。今私はこの衣服を比丘尼に「受け取るように勧める」べきだ。その比丘尼は受け取らないだろうが……私がすべきことは為されたことになるであろう。そこでそれを「比丘尼に受け取るように勧めたところ、」(比丘尼)は受け取った。この事を……[僧伽藍]の比丘たちは(その話を)聞いた……(そして)尋ねた、「何故比丘は……与えなかったのに、受け取るように勧めたのか……」

注釈

So 19530b のオモテ面は第 23 波逸提に対応しているので、そのウラ面は第 24 波逸提に対応する可能性が高い。その第 24 波逸提は、『四分律僧戒本』によれば「若比丘。與非親里比丘尼作衣者。波逸提(若し比丘。非親里の比丘尼に衣を作せば波逸提なり)」(『大正』 vol. 22, p. 1018c19) とある。破損があつて文脈を復元することは難しいが、4 行目の *ny'wōn* 「衣服」は、この推定を支持するだろう。また 2 行目と 3 行目には *'zw* 「私」も見えていて、この部分が、戒律が成立することになったエピソードを伝えていると考えられる。実際この断片には『四分律』の第 24 波逸提成立にまつわる縁起を説明する部分(『大正』 vol. 22, p. 650c12-19)と一致する文言が見つかる。当該の部分を下に引用し、ソグド語のテキストに一致する部分に下線をほどこした。

650c12 彼比丘尼數請我。以鉢中遺餘與我而我_{c13}不取。我作如是念。彼比丘尼數數請我。_{c14} 以鉢中遺餘與我而我_{c15}不取。我今寧可持_{c15} 此衣分與彼比丘尼。彼必不受足以相遺。_{c16} 而彼便受之。爾時諸比丘聞。其中有少欲知_{c17} 足行頭陀樂學戒知慚愧者。嫌責彼比_{c18}丘言。云何比丘。與比丘尼衣不捨而請他_{c19}耶。

「彼の比丘尼數ば我れを請ひ、鉢中遺餘を以て我れに與ふ、而かも我れ取らずと。我れ是くの如きの念を作す、彼の比丘尼數數我れを請ひ、鉢中の遺餘を以て我れに與ふ、而かも我れ取らず、我れ今寧ろ此の衣分を持つて彼の比丘尼に與ふべし。彼れ必ず受けず、足して以て相遺らんと。而も彼れ便ち之を受くと。爾の時諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして、頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、嫌責して彼の比丘に言はく、云何ぞ比丘、比丘尼に衣を與へて捨てずして他を請ふや」

本文中の説明が必要な語形がいくつかある。

2 [pc]y'zy nw'yδ'y. pcy'zy を nw'yδ 「招待する、勧める、促す」の目的語となる動名詞だと理解した。そして nw'yδ'y は 3 人称単数の過去を表す希求法と解釈した。

3-4 'zw L' pcy'z[m]. 「我不取」に対応する。先行する nw'yδt s[kwn] から、この部分が現在形を用いる文脈であることが分かるから、次行に 1 人称単数現在形の人称語尾を補った。過去を表す文脈であれば、pcy'z は、否定辞とともに使われている 1 人称単数の injunctive 形と理解されるだろう。

5 [pcy'zy nw'y](δ)[']w. mn' s'st が先行しているので、不定詞が期待される。nw'yδ'w は、aka 語幹の現在不定詞形 nw'yδ'y が、-w で終わる珍しい形式だと考えた。s'st は従属節を支配することもあるので、nw'yδ'w は 1 人称単数の injunctive 形とみなすべきかもしれない。いずれにしても大

部分が破損しており、筆者のやや大胆な復元をもとに、これ以上詳しく議論する必要はないであろう。

5 'wyn šmn'nch. 男性単数属格与格の冠詞 'wyn は、この文脈では破格である。女性単数主格の ZKh/x' が期待される⁽³¹⁾。

7 sBr'ckh. この語は、「言葉、語」を意味する。別に「事柄」を意味することもある。ここでは、「この物」すなわち衣服のことを指す可能性もあるが、他動詞 'ytδ'rt の後ろに置かれていて、目的語とみなすことにも問題がある。主人公の比丘が、同僚の比丘たちにこの経緯を語ったという文脈を想定した。

9 šmn(y). ここは šmn(?) と読んで、呼格形とみなすことも可能である。

10-11 prw pcγ'z nw'y[δ'y]. ここでも一つの語である nw'yδ'y が2行にまたがって書かれていると理解した。prw pcγ'z を nw'yδ に支配された pr 不定詞と見なした。nw'yδ'y は3人称単数の過去を表す希求法形を想定して復元した。

Mainz 155

Reck (2016, p. 326) によれば、ごく小さい断片である Mainz 155 (Reck, No. 920) も同じ写本に属すると言う。残された語はわずかである。ここでb面と呼んでいる側には snkr'm 「僧伽藍」が見られる。So 10921 verso の7行目の冒頭に [snkr'm s'](r) を補っている。その部分を補う断片のようにも見えるが、もう一方の面はこの推定を支持しないように見える。

テキスト

Side a

- 1](. k)[]
- 2](r)yš't

Side b

- 1 snkr'(m)[
- 2 (...)[

5. まとめ：テキストの構成

冒頭でも述べたように、3つの断片は、個々の貝葉の5分の1程度しか残していないので、このソグド語の広律の構成を把握することは簡単ではない。ただ3断片に残された第20波逸提から第24波逸提までの、わずかな部分からでも、各波逸提の全体が以下のような五つの部分から構成されていたと推定することが可能である。

⁽³¹⁾ もしかしたら、ny'wδn を受ける3人称の代名詞とみなすべきなのかもしれない。それにしても対格形が期待されるところではある。

- 1) 表題が太く大きな文字で書かれている (So 19530a recto 8-10: 第 22 波逸提)。
- 2) 各波逸提が成立することになったエピソードが続く (So 10921 verso 1-12: 第 21 波逸提; So 19530a recto 11-12: 第 22 波逸提; So 19530b verso 1-11: 第 24 波逸提)。
- 3) その締めくくりで、釈尊が当該の波逸提を示す (So 10921 recto 1-2? 第 20 波逸提; So 19530b recto 1-3: 第 23 波逸提)。ソグド語のテキストでは、この部分の波逸提では、他の部分と同じ大きさの文字で書かれているが、行下げをして他の部分とは区別して書かれている。
- 4) 道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』と同じように戒律を犯す原因(縁)を簡条書きにして示す (So 10921 recto 3-8, 第 20 波逸提; So 19530b recto 3-10: 第 23 波逸提)。
- 5) 戒律の具体的な内容の説明が置かれている (So 10921 recto 8-13: 波逸提 20; So 19530a recto 1-7: 第 21 波逸提; So 19530a verso: 第 22 波逸提; So 19530b recto 10-12: 第 23 波逸提)。

逆に波逸提ごとに対応する断片を見れば、

第 20 波逸提 : 3) So 10921 recto 1-2?; 4) So 10921 recto 3-8; 5) So 10921 recto 8-13

第 21 波逸提 : 2) So 10921 verso 1-12(全面); 5) So 19530a recto 1-7

第 22 波逸提 : 1) So 19530a recto 8-10; 2) So 19530a recto 11-12; 5) So 19530a verso 1-13(全面)

第 23 波逸提 : 3) So 19530b recto 1-3; 4) So 19530b recto 3-10; 5) So 19530b recto 10-12

第 24 波逸提 : 2) So 19530b verso 1-11(全面)

これらのうち上記の 2), 3), 5) は、『四分律』でもこの順序で配列されている。このソグド語のテキストが特異なのは、冒頭に各波逸提を大きな文字で書いて見出しにしている 1) があることと、各波逸提の内容の一般的な説明である 5) と 3) の間に、道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』に基づく戒律を犯す原因(縁)を簡条書きにして示すことで、これは『四分律』にはない。それどころかどの広律にも存在しない、非常にユニークな部分である。

6. おわりに

「日暮れて道遠し」という言葉がある。日本という中国仏教文化圏に生まれ育った私は、いつの頃からか、同じように中国仏教文化圏で仏教を信仰することになったソグド人の仏教信仰の実態を、残されたソグド語仏典の解説によって明らかにしたいと願ってきた。必ずしも努力を怠った訳でもないが、実情はいくつかのソグド語仏典の原典を明らかにすることに留まったままである。歴史学の立場から私のすぐ隣の道を歩いておられた森安さんという尊敬すべき道侶を失って、古稀を過ぎた私は、まさに「日暮れて道遠し」という感を強くする。今回松井さんから機会を頂いたにもかかわらず、本稿のような中途半端で詰めの甘い論文を発表して責めを塞ぐにつけて、森安さんのメールにあった、「とはいえ、こうした問題の解決は、もう私の仕事ではないだろうと認識しています」という言葉が、今の私に対する慰めでありまた叱咤のようにも思える。

参考文献

【和文・中文】

- 石井公成 2023. 「第3章 東アジア仏教の基調を築いた僧侶・居士」『アジア人物史 ユーラシア東西ふたつの帝国 6～11世紀』講談社, pp. 143–203.
- 石見清裕 2016. 『ソグド人墓誌研究』汲古書院.
- 柴新江 2001. 『中古中國與外來文明』生活・讀書・新知三聯書店.
- 森部豊 2010. 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部.
- 森安孝夫 1989. 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp. 51–76.
- 森安孝夫 1991. 「ウイグル＝マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32.
- 森安孝夫 1997. 「ウイグル文字新考——回回名称問題解決への一礎石」『東方学会創立五十周年東方学論集』東方学会, pp. 1238–1226 (逆頁).
- 吉田豊 1994. 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報 京都』66, pp. 380–271.
- 吉田豊 2007. 「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の形式の来源について——百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」『仏教学研究』62/63, pp. 46–87.
- 吉田豊 2015. 「漢語仏典と中央アジアの諸言語・文字——中世イラン語、特にソグド語仏典の場合」新川登亀男 (編)『仏教文明の転回と表現——文字・言語・造形と思想』勉誠出版, pp. 24–51.
- 吉田豊 2017. 「ソグド語訳『楞伽師資記』と関連する問題について」『東方学』133, pp. 52–31 (逆頁).
- 吉田豊 2022. 『ソグド語文法講義』臨川書店.
- 吉田豊 2024. 「シルクロード商人の妻たちの墓誌から——西安出土の3つの中世イラン語碑文」『史艸』65, pp. 1–30.

【欧文】

- Benkato, A. 2024. “Lost Turfan fragments from the Nachlass of W.B. Henning,” *Bulletin of the School of Oriental and Asian Studies* 87-3, pp. 461–477.
- Cheung, J. 2007. *Etymological dictionary of the Iranian verb*, Brill.
- MacKenzie, D. N. 1970. *The ‘Sūtra of the Causes and Effects of Actions’ in Sogdian*, Oxford University Press.
- MacKenzie, D. N. 1976. *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Brill.
- Reck, Chr. 2015. “Work in progress: The Catalogue of the Buddhist Sogdian fragments of the Berlin Turfan collection,” in: A. Krasnowoloska and R. Rusek-Kowalska (eds.), *Studies on the Iranian World I: Before Islam*, Jagiellonian University Press, pp. 59–66.
- Reck, Chr. 2016. *Berliner Turfanfragmente buddhistischen Inhalts in soghdischer Schrift*, Franz Steiner.
- Sims-Williams, N. 1981. “The Sogdian sound-system and the origins of the Uyghur script,” *Journal asiatique* 269, 347–360.
- Yoshida, Y. 2008. “Die buddhistischen sogdischen Texte in der Berliner Turfan-sammlung und die Herkunft des buddhistischen sogdischen Wortes für *Bodhisattva*,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 61-3, pp. 325–358. (Übersetzt von Y. Kasai in Zusammenarbeit mit Chr. Reck)
- Yoshida, Y. 2009. “Buddhist literature in Sogdian,” in: R. E. Emmerick and M. Macuch (eds.), *The literature of pre-Islamic Iran* (Companion volume 1 to *A history of Persian literature*), I.B. Tauris, pp. 288–329.
- Yoshida, Y. 2010. “On the Sogdian version of the *Muryōjukyō* 無量寿経 or Larger *Sukhāvātīvyūha*,” in: T. Irisawa (ed.), “*The way of Buddha*” 2003: *The 100th anniversary of the Otani Mission and the 50th of the Research Society for Central Asian Cultures*, Toho Shuppan, pp. 85–94.
- Yoshida, Y. 2013. “When did Sogdians begin to write vertically?” 『東京大学言語学論集』33, pp. 375–394.
- Yoshida, Y. 2013a. “Buddhist texts produced by the Sogdians in China,” in: M. de Chiara et al. (eds.), *Buddhism among the Iranian peoples of Central Asia*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, pp. 155–179, pl. 1.
- Yoshida, Y. 2015. “A handlist of Buddhist Sogdian texts,” 『京都大学文学部研究紀要』54, pp. 167–180.
- Yoshida, Y. 2019. “On the Sogdian *Prāthārya-sūtra* and the related problems: One aspect of the Buddhist Sogdian texts from Turfan,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 72-2, pp. 141–163.
- Yoshida, Y. 2023. “Chapter 9: Chinese in Sogdian script and Sogdian in Chinese characters,” in: B. Meisterernst (ed.), *When*

the West meets the East: Early Western accounts of the languages of the Sinosphere and their impact on the history of Chinese linguistics, Harrassowitz, 205–218.